

# 医師らが意見交換

製鉄記念室蘭病院(前田征洋病院長)の救急症例検討会が、室蘭市知利別町の同病院で開かれ、外国人観光客(インバウンド)の増加に伴う最近の救急医療現場で起きた症例や搬送時の処置などについて、西胆振の救急隊員が同病院の医師らと意見交換。救命率向上を目指し知識を共有していた。

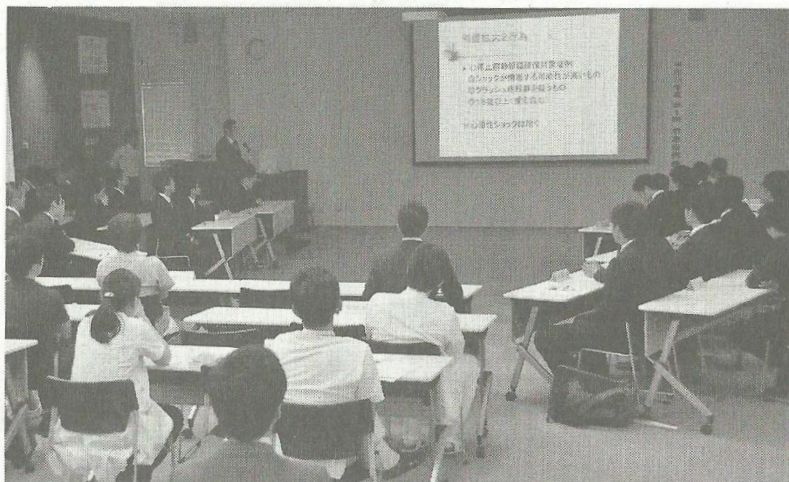
(松岡秀宣)

# 外国人客、救命率向上へ

## 製鉄記念室蘭病院で検討会

室蘭、登別、西胆振、客への対応。白老町消防署の石部衛主任は、症状を聞き取る際に「アイフオンの翻訳アプリを用いたため、大幅にコミュニケーションが取れるようになった」と説明した。

2020年(平成32年)に、アイヌ文化復興のナ



外国人観光客への対応など救急医療現場で起きた症例・搬送例について意見交換した検討会

シヨナルセンター「民族共生象徴空間」の国立アイヌ民族博物館・国立民族共生公園が完成する同町では、インバウンドを含む年間100万人の来訪が想定されるという。石部主任は「今後は外国人からの救急要請も当然もつと増えてくる」と予想していた。

同病院からは「救急外来にもインバウンドの受診者が増えているが、観光客自身がスマートフォンを保持しているケースがある」とした一方、旅行日程の関係などから「明日までに治せ」や「薬をたくさんよこせ」と(無理な)注文も多いなどと紹介した。

また、外国人の救急搬送が1カ月2〜5件ほどある登別市消防署は、「チェックシートを用いたり、通訳できるホテル従業員に対応してもらう場合が多い」と説明。傾向として顕著なインバウンド増に伴う外国人救急患者の搬送や対応の在り方を話し合った。

このほか「ショックを伴うブドウ糖投与症例」「上気道異物により、呼吸停止に至った症例」「急性大動脈解離を診断された症例」も発表され、参加者は一刻を争う事態での対応や連携を改めて確認していた。